

## 教員の近況

### 梶 木 良 夫（日本中世史担当）

二〇二一年度は、ようやく後期第四週目から対面授業に移行したものの、演習形式を中心に授業の「質」を確保するのに苦労した。それは履修学生も同様だったと思われるが、教える側からみれば、受講者が「大学の学びの質」を十分に認識できないまま、今後高度な専門分野の講義や演習を履修することになり、来年度以降の授業に影響が出ないよう十分な必要性を改めて痛感した。なお、この最中に、翌年度からの「授業改革」実施が公になり、教務委員としての膨大な公務に追われる日々が続いたことを特記しておく。

二〇二一年度も、学校法人行吉学園の教育助成費申請に基づき、中世史料の原寸大カラー複製一二六点を制作した。京都府立京都学・歴史館が公開する「東寺百合文書WEB」から、「永享六年二十一口方評定引付」などを対象とした。特に、冊子体は、現状と同様の復元を制作した。これには、エイチ・エ

ス写真技術（株）の協力を得たことを付記する。この素材は、歴史資料の内容を、それを伝える「モノ」の要素と併せて認識する力量を身につける目的で制作しており、日本中世史のゼミや日本古文学会で活用している。

### 川 森 博 司（日本民俗学担当）

二〇二一年度もコロナ禍という状況を引きずりながら、教育・研究の活動を展開していくこととなった。そして、その状況は二〇二二年度にまで持ち越されている。三年間という年月の意味は大きい。それぞれの人生をまっとうに展開していくためには、個人も社会も、そろそろ「腹をくくって」かかる必要があることが実感される。

ステイブン・R・コヴィーの『7つの習慣』の中にある『最良』の敵は『良い』である」という言葉が想起される。目の前の世間的配慮によって「まあまあ無難で良い」と思われる方向を選択し続けることによって、自分の人生にとって、そして社会にとっての「最良」を取り逃していく、そんな状況か

ら早く脱却したいものだと思う。

個人的には、六〇代も中盤に入り、研究的にはまとめの段階である。これまで先端を目ざして研究してきたものの角がとれて、全体のつながりが見えてくるのは楽しい。ある意味、研究から勉強への回帰である。この楽しさを伝えられるよう、日々の授業に取り組んでいきたいと思っている。

#### 【二〇二一年度の研究活動】

〈書評〉

・「中川裕著『改訂版「アイヌの物語世界」』(『神女大史学』第三八号、二〇二一年一月)

#### 齋藤 瑞 穂 (日本考古学担当)

寺沢知子教授の後任として、四月に着任しました。東北は岩手の産ですが、関西は「転勤族」にともなわれて中学三年〜高校三年までの四年間を過ごした地、約四半世紀ぶりのこの空気を満喫しています。前任校では埋蔵文化財調査室という部署におり、キャンパス内の発掘調査に従事しておりました。したがって教壇に立つのは四年ぶりでしたが、大学院・

学部の高ゼミに集う個性豊かな専攻生たちのおかげで、すぐにブランクを取り戻すことができました。

研究の面では、弥生時代が始まるメカニズムの問題に着手したところです。地を這う虫の視点で神戸から、他方空飛ぶ鳥になって東アジアを視野に入れつつ、両面作戦で人々の生きざまを掘り起こしてまいります。どうぞよろしくお願い致します。

#### 鈴木 宏 節 (東洋史担当)

着任から三年が経過しました。ながらく東洋史を担当された中尾友則先生が二一年三月に退職され、外国史の専任教員は西洋史の吉村真美先生と私の二人だけになりました。スタッフの数では勝負になりませんが、時代や地域の枠をこえて幅広く世界の歴史を学べる史学科になるよう模索しています。

世界の歴史と言えば、岩波講座に論文を掲載することができました。匈奴からモンゴルにいたる中央ユーラシアにおける遊牧帝国の展開を概観しつつ、トルコ系遊牧民である突厥の国家構造や部族支配、その要諦となる機序をまとめました。紙幅の限られ

た概論でしたので、今後、解説しきれなかった部分を増補・修訂していくつもりです。

もはや二十年以上も前の出来事になりますが、大学街の書店で旧シリーズ・第二期の岩波講座を予約購読し、さらに第一期（一九六九～七一年刊行）も古書店街を巡りつつ一冊一冊買い集めました。もちろん当時は次のシリーズで執筆するとは夢にも思っておりませんでした。四半世紀前の思いを胸に突厥碑文を読み直します。

#### 【二〇二一年度の研究活動】

〈共著〉

・吉澤誠一郎 監修『論点・東洋史学 アジア・アフリカへの問い158』ミネルヴァ書房、二〇二二年一月

〈論文〉

・「トルコ系遊牧民の台頭」荒川正晴 責任編集『岩波講座世界歴史6 中華世界の再編とユーラシア東部 四〜八世紀』岩波書店、二〇二二年一月

#### 松下 孝 昭（日本近現代史担当）

「軍隊の立地と地域社会」という研究領域は、日本近現代史学界において隆盛が著しく、その一翼を担う形で各地の事例研究を進めている。

具体的には、旭川・豊橋・高田といった陸軍師団の所在地において、軍隊と共存しうる都市形成がいかに進められたかという課題を設定し、いくつか論稿を発表してきた。

今後は戦後史に踏み込み、朝鮮戦争勃発による日本再軍備の一環として警察予備隊（現在の自衛隊の前身）が創設されたことが、地域社会にいかなる波紋をもたらしたかというテーマに関心を移していくつもりである。

#### 村田 路人（日本近世史担当）

私は長年、大学で日本史の専門教育に携わってきましたが、その間、古文書教育を特に重視し、専門教育の柱の一つと位置づけてきました。それは、一言でいえば、歴史研究にとって、過去の人々の営みの中で作成され、現在の私たちにとっては歴史研究

の素材となる史料というものは、具体的にどのよう存在なのか、どのような顔をしているのかをしっかりと知ることが大切という考えから来ています。活字史料を見ているだけでは、本当の意味で歴史を理解することはできないと思います。

ところで、私は文化財保護関係の委員を務めている大阪府交野市で、毎年市域の近世・近代文書の集中調査をしています。二〇二一年度は二〇二一年一月二七・二八の両日に実施し、本学史学科の学生・院生も一五名参加しました。大阪大学や甲南大学などの学生・院生とともに、古文書の原物に触れ、写真撮影・目録とり・ラベル貼り・古文書修復等の作業を行いました。これも古文書教育の一環です。

早くも定年まで二年半となりましたが、退職まで古文書教育を重視した専門教育を続けたいと考えています。

#### 【二〇二一年度の研究活動】 (著書)

・適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会編『緒方洪庵

全集第五巻 書状(その二) その他文書 (附)

適塾姓名録』大阪大学出版会、二〇二二年三月(共編著)

・平雅行・横田冬彦他一五名『日本史探究』実教出版、二〇二二年三月文部科学省検定済(共著)

(論文)

・「堤外地政策からみた近世の開発と治水」『歴史科学』二四五号、二〇二一年五月

・「Water Management in Tokugawa Japan」(英訳: Patricia Sippel 氏) Gary P. Leupp, De-min Tao 編

『The Tokugawa World』Routledge、二〇二一年九月)

#### 山内晋次(日本古代史担当)

昨年(二〇二一年)、コロナ禍のなかで還暦を迎えました。基礎疾患とやらをかかえながらも、いまのところコロナに感染することもなく、元気に過ごしています。ただ、以前のように、すこし時間があれば国内外の学会・研究会や現地調査に行こう、というような意欲は確実に減退しています。これは、長

引くコロナ禍のせいなのか、それとも加齢のせいなのか、いずれにしる困ったものです。とはいえ、インドネシア・ジャワ島のウエリラン山、イランのホルムズ島、イタリアのシチリア島、中国の福州などなど、現地調査をしてみたいなあと思う場所はまだまだたくさん残っています。また、硫黄流通史や航海信仰史については、なんとか本にまとめたと思っていますし、中国海商の倫理・宗教観やミカンと華夷秩序の関係など、さらに研究を深めていきたいテーマもいくつかあります。まだまだ「隠居」というわけにはいかないようです。

#### 【二〇二一年度の研究活動】

〈共著〉

・吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学—アジア・アフリカへの問い158』ミネルヴァ書房、二〇二二年一月

〈論文〉

・「東アジア海域世界における仏教—日本に来航した唐・宋海商の信仰事例を中心に—(韓国語)」国

立海洋博物館(大韓民国・釜山)編『仏教文明交流と海域世界』、同館、二〇二一年一二月

・「硫黄流通史研究からみた日本とアジア」『全歴研究紀要(全国歴史教育研究協議会)』五八、二〇二二年三月

〈講演〉

・「硫黄流通史研究からみた日本とアジア」、全国歴史教育研究協議会・第62回研究大会(大阪大会)、関西大学、二〇二一年七月

・「日本近世の航海信仰からみた古代の持衰」、  
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、  
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群・特別研究事業・第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」、福岡市、二〇二二年三月

#### 吉村(森本)真美(西洋史担当)

コロナ禍で海外資料調査をはじめ研究計画が変更を余儀なくされているため、参加している三つの科研がいずれも期間延長となりました。世界的には感染状況が収束のきざしを見せ、海外との人の往来

も戻ってきましたが、ウクライナ情勢の緊迫の長期化に加え、インフレと円安の打撃で、西洋史研究者の研究活動の先行きはまだ不透明です。

個人的には、とんでもない時間がかかってしまったイギリス帝国史の翻訳が、昨夏ようやく出版にいたりしました。この翻訳作業と、並行して進んでいた三科研の共同研究から出てきた帝国史・ジェンダー史関連のいくつかのアイデアをメンバーと練り、ややアウェイな場を含めて報告し、知見を得ています。オンライン学会に慣れてきたせいもあってスケジュールを詰め込みすぎ、活字へのアウトプットがさっぱり追い付いていないことを深く反省する日々です。

### 【二〇二一年度の研究活動】

〈研究報告〉

- ・シンポジウム「シンデレラ譚シンポジウム」、コメントイター、世界子ども学研究会・第二七回研究会、オンライン、二〇二一年九月一八日。
- ・パネル報告「女をめぐる『感情』―帝国のジェンダーとセクシュアリティ」パネル報告「女性たち

の「生」を可視化する―ジェンダーからみるイギリス帝国」第二報告、ジェンダー史学会・第一八回年次大会、同志社大学(オンライン)、二〇二一年一月二二日。

- ・報告「女囚と移民とリフォーマー―帝国のジェンダーとセクシュアリティ―」イギリス帝国と女性たち―自由／不自由と「生きる」ということ」第二報告、関西ジェンダー史カフェ・関西イギリス史研究会共催研究会、オンライン、二〇二二年二月五日。

〈その他〉

- ・翻訳(共訳) フィリップ・レヴァイン、並河葉子・森本真美・水谷智訳『イギリス帝国史―移民・ジェンダー・植民地へのまなざしから』昭和堂、二〇二一年。
- ・書評「書評: Tamara S. Wagner, *The Victorian Baby in Print: Infancy, Infant Care, and Nineteenth-century Popular Culture*(Oxford: Oxford University Press, 2020)『ヴィクトリア朝文化研究』第一九号(二〇二二年一月)、二七八―八二頁。